

全校研究主題

『聴覚障害児（者）の主体性を育むための実践研究』

1. 研究主題の設定理由

○学習指導要領の改訂

- ・予測困難な時代を生きるために必要な資質・能力（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」）の育成が求められている。

○本校のこれまでの研究成果

- ・幼児児童生徒が「生きる力」を身に付けるためには、自ら学習に取り組んだり、自ら課題を解決したりする主体性の育成が重要であることが指摘されている。

幼児児童生徒一人一人の自立と社会参加に向けた
基盤となる力である主体性の育成を目指す。

2. 本校が育成をめざす主体性が発揮されたときの幼児児童生徒の姿とは？

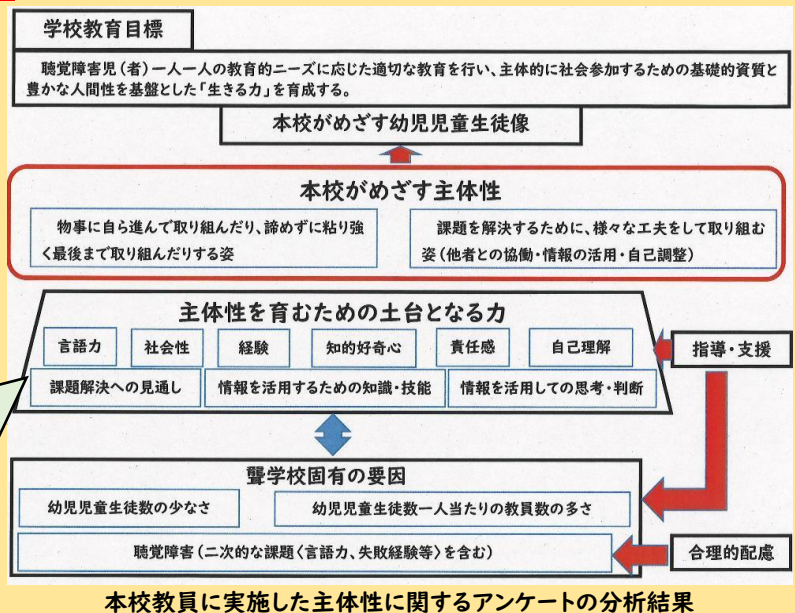
○物事に自ら進んで取り組んだり、諦めずに粘り強く最後まで取り組んだりする姿

○課題を解決するために、様々な工夫（※）をして取り組む姿

（※）様々な工夫の例：

- ・他者と協働する姿（相談、協調、意見の伝え合い等）
- ・情報を活用する姿（人、書籍、ICT 等の様々な手段で、必要な情報を集める・整理する・まとめる等）
- ・自己調整する姿（計画を立てる、優先順位をつける、振り返る等）

校内教員を対象に実施した主体性に関するアンケートからは、本校の幼児児童生徒が主体性を発揮するために必要な力として、言語力、社会性、経験等、9つの力が必要であり、それらの力は、聴覚障害、幼児児童生徒数の少なさ等、3つの聾学校固有の要因に影響を受けていると、とらえていることが分かった。



3. 主体性の育成をめざした授業/保育/生活指導<以下授業等>改善の方略

方略① PDCA サイクルに基づく、教員チームによる授業等の検討の充実

方略② 学習評価（学習/生活状況の評価や指導の評価）の充実

（3観点＜知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度＞による評価、ルーブリック※評価の活用、教師との対話による振り返り、幼児理解に基づいた評価 等）

※成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表のこと。

3年間の実践研究で見えてきた 聴覚障害児（者）の主体性を育成するための授業等の改善ポイント

方略① PDCA サイクルに基づく、教員チームによる授業等の検討の充実に関する改善ポイント

★ 授業等の検討に関する改善ポイント

- ① 育成をめざす主体性の具体的な姿とその実現に向けた課題を教員間で検討・共有すること。
- ② 学年や担当、教科の枠を越えた多様な視点で授業等を検討すること。
- ③ 検討する際に、主体性を育むために必要な視点を教員間で共有すること。
（本研究の中での取組例＜以下：取組例＞ 保育設計・評価シートや舎生会指導シートのような主体性の育成を位置づけたフレームワークの活用／主体性を育むための要素を共通理解する等の考え方の共有）
- ④ 効率的に情報をやりとりできる方法を活用すること。
（取組例：KJ 法の活用 / ロイロノートや Google Workspace などのクラウドの活用による教員間の授業等に関する情報共有 等）

★ 授業等の改善ポイント

- ① 幼児児童生徒の興味・関心に応じた教材・教具・活動を準備すること。
- ② 幼児児童生徒が興味・関心や学習/生活状況に応じて、活動等を選択できる機会を設定すること。
- ③ 幼児児童生徒の言語能力を把握し、発達段階や障害の状態に応じて、分かる指導（直接体験の活用、視覚的支援、手話の活用、授業のパターン化等）や思考を促す指導（役割意識や課題意識をもたせる、学習/生活状況よりも少し難しい課題の設定、振り返り活動の充実等）を工夫して行うこと。
- ④ 幼児児童生徒同士が関わり合うことができるように、教師が促しや仲立ちをしたり、友達との物理的な距離やグルーピングの工夫、活動目的の共有や共同作業場面の設定など友達同士が関わりやすい場作りをしたり、話し合いの仕方を教えたりするなど、個々の発達段階や障害の状態に応じて指導の工夫を行うこと。

方略② 学習評価（学習/生活状況の評価や指導の評価）の充実に関する改善ポイント

（3観点による評価、ルーブリック評価の活用、教師との対話による振り返り、幼児理解に基づいた評価等）

★ 3観点による評価、ルーブリック評価の活用、教師との対話による振り返り

- ① 3観点それぞれがとらえている力や評価方法について、チームで研修を深め、共通理解すること。
- ② 聴覚障害と知的障害を併せもつ児童生徒への学習指導や寄宿舎での生活指導では、発達段階や障害の状態に応じた、適切な目標設定を行うこと。
- ③ 児童生徒が内容を理解できる、明確な評価基準を設定すること。
- ④ 授業等の中で、自己の到達度や取組をととしての感情等を振り返る機会を積極的に設定すること。
- ⑤ 振り返る際は、発達段階や障害の状態に応じた支援を講じて、自己評価と他者評価を重ね合わせるようにすること。

★ 幼児理解に基づいた評価

- ① 幼児の良さや可能性に着目した評価を行うこと。
- ② 精選して残した記録（教員間で視点を共有した記録、ねらいに基づく記録、写真や動画の活用等）を基に、幼児の思いや障害に基づく様々な困難さを読み取り、指導計画や環境設定を改善すること。
- ③ 学年の枠を越えた教員で、幼児の個別の指導計画に基づくねらい、日常の遊びや生活の様子を共有し、発達段階や障害の状態等も踏まえて、多面的に評価すること。

岡山県立岡山聾学校

〒703-8217 岡山県岡山市中区土田51番地

TEL:086-279-2127 FAX:086-279-8960

E-mail:okaro@pref.okayama.jp

※本資料の無断引用、転載等の二次利用はご遠慮ください。



ホームページ
QRコード

学校ホームページでは、
本研究に関する資料や幼児
児童生徒の日々の学習の様
子などを発信しています。
ぜひ、ご覧ください。



幼稚園の実践

研究テーマ『他者と主体的に関わる幼児を育てる
～聴覚障害教育の専門性と保育と評価の一体化による保育改善～』

令和4・5年度の実践

○ 幼稚園で育てたい力の検討と課題の共有

幼稚園のめざす幼児像を踏まえて、育成をめざしたい力について検討を行った。その結果、生活の中で、幼児が様々な「他者と主体的に関わる姿」をめざすことで集約された。図1のように「他者と主体的に関わる姿」を支える3つの力を仮定し、研究を進めることとした。

次に、育てたい力を育成する上での課題と解決策を検討し、以下の内容を共有した。

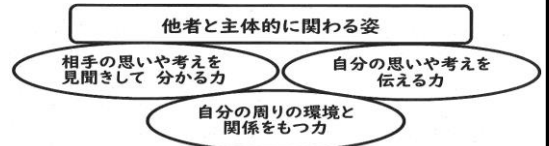


図1「他者と主体的に関わる姿」を支える3つの力

課題

- ① 幼児数の減少による幼児同士の学び合いの機会の少なさ
- ② 幼稚園での指導経験が豊富な教員の減少
- ③ 教員数の減少による業務負担の増加

解決策

- ① 学年の枠を越えた集団での保育づくり
- ② チームによる保育づくりを通じた OJT や外部講師等を活用した研修による、聴覚障害教育や幼児教育に関わる専門性の底上げ
- ③ 持続可能な保育づくりの仕組みの構築

○ 保育づくりの仕組みの構築



縦割り集団での保育を積極的に設定することによる友達同士で学ぶ機会の設定



●外部講師からの助言 岡山県 就学前教育スーパーバイザー 古館美穂子氏
「幼児理解に基づいた評価」は、精選した記録に基づいた、日々の保育の省察が大切



保育設計・評価シート（学校HP参照）に基づき、保育づくりの視点を精選・共有した、チームでの保育検討



保育検討の定式化による時短化やアプリ活用（Google スライド等）による記録の効率化と共有化

○ 「他者と主体的に関わる姿」をめざしたチームによる保育改善

合同保育『おいもになって あそぼう「さつまのおいも」』

●外部講師からの助言 広島国際大 國末和也教授
幼児の言葉を広げるためには、遊びの中で、オノマトペの積極的な活用を指導していくことが大切



オノマトペの表現を多く含む絵本「さつまのおいも」を選択した。「うんしょ とこしょ」の掛け声に合わせて、ツルの引き合いを楽しむことができた。

前時の焼き芋ごっこでは、ねらっていた幼児同士の関わりが少なかった。次時は、芋の家族になりきるごっこ遊びを計画していた。保育検討では、状況に応じて教師が遊びの例を示すことや幼児が遊びを発展させられるように教具を充実させること等の改善が検討された。本時では、教師をまねて布団に見立てた紙の上で寝てみたり、おもちゃの食器を使って、友達と食事を食べさせ合ったりする等、幼児同士でやり取りをしながら、ごっこ遊びを発展させて楽しむことができた。

合同保育『みずあそび』



前年度は、水への恐怖心からプールに近づくことさえ避けていた幼児がいた。今年度は、本人のペースに合わせて、水遊びを広げることを担任間で共通理解して保育を行った。水溶き片栗粉で友達が遊ぶ様子を興味深そうに注目している姿を見つけ、教師が遊びに誘った。友達と一緒に片栗粉の不思議な感触を楽しみ、最後は、粉を洗い流そうと、小プールに入る様子も見られるようになった。その後は、友達をまねて、教師に水風船を投げる等して水遊びを楽しむことができた。

合同保育『ようちぶまつりを しよう』～食べ物みこしづくり～



●外部講師からの助言

本校元副校長 石井敦子氏

この保育での「他者と主体的に関わる姿」をめざした保育づくりの要点

- ・選択できる、分かって表現できる環境設定
- ・友達の作品を見て、影響を与え合える環境設定
- ・意図的に困る場面を保育の中に組み込んだ環境設定
- ・幼児の思いに対する共感的な教師の言葉掛け
- ・幼児の好きな活動の中で、まだ獲得していない少しだけ難しい言葉を教える教師の意図的な関わり

合同保育『はっぴょうかいを しよう』

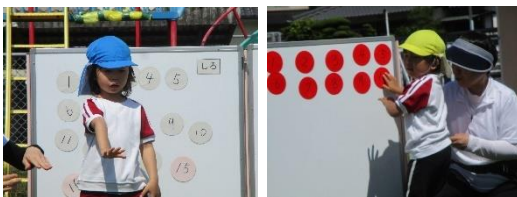


前時には、途中で泣いて魚釣りができなくなった年少児。担任は、最後の一匹を釣りができなかった気持ちを読み取り、ペアの年長児の担任と共通理解を図った。担任から年長児に状況を説明することとなった。発表会本番では、年長児が友達の気持ちを考えて最後の魚を譲り、二人で満足感をもって魚釣りをやり遂げることができた。

令和6年度取組

○「他者と主体的に関わる姿」をめざしたチームによる保育改善の継続

合同保育『うんどうかいを しよう』



前時の玉入れの練習では、結果発表の際、教師が玉を数えて発表していた。多くの幼児は、土いじりをしたり、別の方を向いていたりと、結果発表に注目することが難しい状況だった。保育検討では、①入った玉の数を視覚化することによって、注目ができるようになること、②幼児に数える係を任せた方が、幼児が自分から注目できるようになること、等が検討され、保育改善を行った。係に選ばれた幼児は、以前と変わり、玉を数える際に、教師が一つずつ投げる玉を見逃すまいと注目し、数を正確に数えて、勝敗を理解して玉入れを楽しむことができるようになった。

○ 自立活動の指導を意識した保育づくり

令和4～5年度取組について、部内で振り返りを行う中で、保育検討の際に、自立活動に関する内容が十分に検討なされていないことが分かった。

そこで、年度当初に部内で幼児全員の自立活動の目標を確認する機会を設定したり、保育設計・評価シートに自立活動の視点での環境構成等の工夫を明記して、担任間で共有したりするようになった。

合同保育『ようちぶまつりを しよう』～乗り物だんじりづくり～



自立活動の目標の一つとして「生活の中で使用できる語彙を増やす」ことを設定していた幼児がいた。「だんじり」は、濁音が混じっていて発音しにくく、「だんじり」と「みこし」の区別が難しい状況だった。事前検討した保育設計・評価シートに基づき、だんじりやみこしを楽しむごっこ遊びや、個別指導の時間等に、口形文字付き文字カードに発音誘導サインを添えて、口声模倣を促す指導を行った。活動を繰り返す中で、自由遊びの時間に、自分から「だんじり(がしたい)」等と音声で気持ちを伝えられるようになった。

まとめ

課題①→ 学年の枠を越えた縦割り集団での保育を行事の際に積極的に設定したことで、教師や友達との様々な関わり合いが生まれ、遊びを発展させたり、新しいことに挑戦したりする幼児の姿を捉えることができた。

課題②→ 個別の指導計画や保育設計・評価シート、外部講師からの助言に基づいた保育の計画や日々の評価・改善を行う中で、「他者と主体的に関わる姿」を支える3つの力を個々の幼児の発達段階や障害の状態に合わせて伸ばすことができた。また、聴覚障害教育や幼児教育の専門性を持ち寄って保育検討を行う中で、個々の教師の指導力を向上させることができた。さらに、保育設計・評価シートの分析を部内で行い、個々の教員が考えた指導のアイデアを『「他者と主体的に関わる姿」を育てる保育づくりのポイント』として集約し、幼稚部教員の専門性の一つとして職員間で共有することができた。(学校HP参照)

課題③→ 保育記録が追いつかないことがしばしばあった。写真や動画の活用等、効率的に記録でき、チームで共有しやすい手段を積極的に活用していく必要がある。

参考文献: 文部科学省『指導と評価に生かす記録』チャイルド本社(2021)

岡山県立岡山聾学校『研究・実践の記録 令和元・2年度』(2021)

小学部の実践

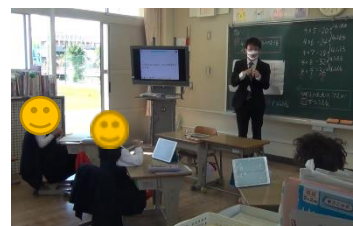
研究テーマ『一人一人の児童が主体的に取り組む算数学習』

令和4年度の実践

岡山県から出された「特別支援学校における新しい教育課題研究」を受け、「新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり」に向けて、研究・研修を行った。特に学習評価の評価基準に重点を置き、授業実践を通して、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点の評価の仕方の検討を行った。

◎本時の評価基準と評価方法（第2学年 算数科「かけ算（1）」）

	A 児	B 児
思考・判断・表現	乗数が1増えると答えが4ずつ増えることを使って、4の段の九九をつくり、そのよさや特徴に触れながら説明している。	乗数が1増えると答えが4ずつ増えることを使って、4の段の九九をつくっている。
評価方法	発言・ノート	発言・ノート



3学期は、教師側の学習評価をもとに、児童が算数学習に主体的に学びに向かうことができる手立てとして、「ルーブリック評価」を作成した。ルーブリック評価とは、絶対評価（目標に準拠した評価）のための判断基準表のことである。

◎児童による自己評価「ルーブリック評価」（第1学年 算数科「大きい数」）

	😊	😊	😞
第10時（本時）	お金の出しかたを2ついじょうかんがえることができた	お金の出しかたを1つかんがえることができた	お金の出しかたをかんがえることができなかった
第11時～12時	100のまとまりを見て100といくつでかんがえた	10のまとまりを見てかんがえることができた	ひとつずつかぞえてかんがえた

令和5年度の実践

令和4年度の実践を受け、ルーブリック評価についての研修及び児童が主体的に算数を学ぶための支援を加えた授業実践を行った。

（1）ルーブリック評価についての研修

研修（講師：広島国際大学 國末和也教授）を基に、小学部で使えるプレゼンテーション用ルーブリック（授業において調べたことや考えたことを発表する場合のルーブリック）について検討した。

【左】
低学年向け

【右】
高学年向け

発表用ルーブリック	S	A	B	C	発表用ルーブリック	S	A	B	C
内容	目標に沿っている。理由を付けて。	目標に沿っている。	自分の考えをもって。ヒントや他者の意見を参考に。	自分の考えをもって。ヒントや他者の意見を参考に。	内容	目標に沿っている。理由を付けて。	目標に沿っている。	自分の考えをもって。ヒントや他者の意見を参考に。	自分の考えをもって。ヒントや他者の意見を参考に。
コミュニケーション手段	音声と手話を使って。相手を意識して。	音声と手話を使って。	自分の得意なコミュニケーションモードを使って。	自分の得意なコミュニケーションモードを使って。	コミュニケーション手段	音声と手話を使って。相手を意識して。	音声と手話を使って。	自分の得意なコミュニケーションモードを使って。	自分の得意なコミュニケーションモードを使って。
表現	教科の用語を使って。自分の考えをもちながら。	教科の用語に近しい言葉を使って。	自分なりの言葉で。	言葉以外の方法を使って。	表現	教科の用語を使って。自分の考えをもちながら。	教科の用語に近しい言葉を使って。	自分なりの言葉で。	言葉以外の方法を使って。
聞き方	自分の考えをもちながら。	あいづちをうちながら。	相手の注目しながら。	教師の促しを受けながら。	聞き方	自分の考えをもちながら。	あいづちをうちながら。	相手の注目しながら。	教師の促しを受けながら。
文章構成					文章構成				

（2）児童が主体性を育むための授業実践

児童が自己評価できるツールを用いたり、主体的に学びに向かえるような支援を取り入れたりしながら、授業実践を行った。

（第3学年 算数科「重さ」）

【ルーブリック評価の活用】

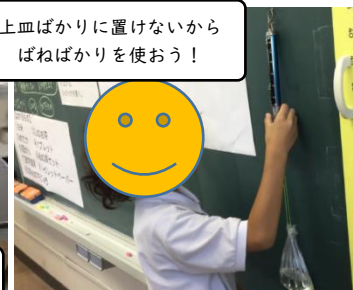
S	1kgの重さを思い出しながら予想し、はかるものに合うはかりを選んではかることができた。
A	重さを予想し、はかるものに合うはかりを選んではかることができた。
B	先生と一緒に予想し、はかりを選ぶことができた。

【具体物の提示、操作】



1 kgの砂の量感を確かめる

上皿ばかりに置けないから
ばねばかりを使おう！



令和6年度の取組

令和4・5年度の反省を受けて、「主体性」の定義を明確にするために小学部で検討を重ね、「小学部がめざす主体的な姿」を右の①～③の姿とした。

- ①困った時ややりたい時に、自分で選択する姿
- ②次につながるひらめきが出る姿
- ③失敗してもあきらめずに取り組む姿

この3つの姿を評価のポイントとし、2つの研究授業を行った。

(1) 第6学年 算数科「立体の体積」

複雑な立体の体積の求め方を考える活動では、5年生で学習したやり方では解決できない問題を提示することで、「底面積×高さ」の公式の有用さへと思考を導くことができた(②の姿)。さらに、練習問題を多く用意し、選択できるようにすることで、自分が挑戦したい問題を選んで取り組むことができた(①の姿)。また、令和4年度から研究を続けているルーブリック評価を活用した話し合い活動の視点を示したことで、相手に伝わるよう発表することができた。

	S	A	B
話し方	相手を見て話す。 相手に伝わりやすい方法で相手が分かるまで伝える。 今まで学習した言葉や方法を使って説明したり、相手の考えとの違いや共通点を述べたりして伝える。	相手を見て話す。 相手に伝わりやすい方法で相手が分かるまで伝える。	相手を見て話す。 相手に伝わりやすい方法を考えて伝える。
聞き方	相手の話を聞いて、疑問に思ったことを質問したり、自分と同じ考えだったところを言ったりする。	分かったかどうか反応する。分からなかった場合はどこが分からなかったかたずねる。	相手に注目しながら、最後まで話を聞く。



底面をこことすると...

何を買おうかな？



(2) 重複学級 第5・6学年 算数科「おこづかいをつかって、かいものをしよう」

所持金を数えるための「おこづかいシート」、代金を支払うための「しはらいシート」といった支援ツールを用いて、2回買い物活動を行った。児童が興味のある品物を用意して、児童の意欲を湧き立てたり(①③の姿)、2回目の買い物で、1回目のおこづかいの残金を使って、自分が買えるものを選ぶことができるようにしたり(①②の姿)することで、主体的な姿を見ることができた。

まとめ

3年間の研究で、児童の主体的な姿を引き出すために、どのような支援やアプローチをしていけばよいのか様々な方向から考え、実践していった。

令和4年度は、小学部教員全員で評価の仕方を検討し、主体的に学びに向かうことができる手立てを考えた。その結果、小学部教員全員で3観点での評価の認識を深め、ルーブリック評価のような主体的に学ぶ手立てを取り入れながら授業実践を行うことができた。しかし、教員間でルーブリック評価についての共通理解が不十分であるという課題も浮かびあがった。

令和5年度は、教員がルーブリック評価について行った研修を基に、児童が使えるルーブリック表を作成し、活用することができた。また、主体的に学ぶための支援(具体物の選択や操作、興味関心をひくような導入の工夫、等)を教員一人一人が考え、授業実践に生かすことができた。そして、さらに研究を進めるためには、「小学部がめざす主体的な姿」の共通認識が必要であることを確認した。

令和6年度は、「小学部がめざす主体的な姿」について意見を出し合い、3つの姿を示した。そして、その姿を育てるための工夫や実践を算数科の授業で行った。3つの姿を示したことで、授業や児童の姿の指標が明確になり、担当児童を中心に授業や学校生活でどのようにアプローチを行っていけばよいのか考えることができた。3年間の授業実践から、3つの姿をめざす工夫として、「児童に選択の機会を与える」「児童に思考を促す手立て」「興味、関心をひくような提示」を行うことが有効であることが明確になった。また、今回の研究は算数学習に焦点を当てたが、主体的な姿は学校生活の至る場面でも見られると考えられる。実際に、児童会活動の際に前回までの反省を生かして話し合いを進めたり、行事に向けてあきらめずに取り組んだりする姿があり、教科をこえて主体的な姿が見られ始めている。

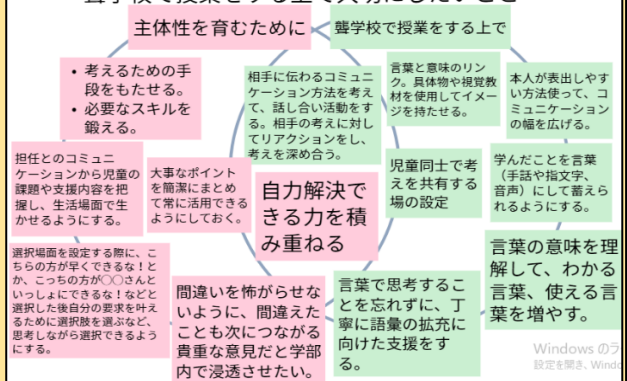
右図はこの研究を通して、小学部教員が児童の主体性を育むために大切にしたいことと、聾学校で授業をするうえで大切にしたいことをそれぞれ書き出したものである。めざす姿が明確になったことで、支援やアプローチをしやすくなったという成果はあったが、算数科の「主体的に学習に取り組む態度」の評価とどう結び付けるかという課題もあった。また、めざす姿については児童の実態によって変わっていくことも考えられるので、検討し続ける必要がある。今後も児童が主体的に学ぶ手立てを考えながら日々実践していきたい。

<参考文献>

文部科学省『主体的・対話的で深い学びの実現』(2016)
岡山県総合教育センター『新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり』(2018)

田中博之『「主体的・対話的で深い学び」学習評価の手引き』教育開発研究所(2020)

協議:主体性を育むために大切にしたいこと、
聾学校で授業をする上で大切にしたいこと



中学部の実践

研究テーマ『複数の視点を取り入れた授業づくりの実践研究』

はじめに

本校中学部の生徒の「主体性」を育むための授業を考えるにあたって、課題となる点を下記のように整理した。

- ①言語力（語彙、読解等）の低さから、学習内容の理解に困難さがあること
- ②内容の定着が不十分なまま学習が進むことから、学習意欲の低下につながること

聴覚障害に起因する言語発達等の遅れが、抽象的な概念や複雑な文章の理解を困難にし、学習内容の理解が深まりにくくなっている。こうした背景から自信をもって発表したり、確かな根拠に基づいて思考したり、自ら学習に取り組んだりすることが難しくなる。主体性を育むためには、個別指導の充実や多様な教材の活用など、きめ細やかな工夫や支援を考える必要があった。中学部は下記の3点に重点を置き、チームで実践研究を行った。

- ①それぞれの教科で取り組んでいる授業実践（評価の3観点に基づいた授業づくり）についてのノウハウを共有することで、授業者の実践力を高める。
- ②複数の教員の視点で生徒を見ることによる細かな実態把握とそれに基づいた指導・支援を行うことで、授業の質を高める。
- ③教科学習を特定の教科担当だけで考えるのではなく、複数の教員で共に考えるという取組を継続することで、チーム力を高める。

令和4年度取組

令和4年度は、数学科の授業を対象に、チームで授業を改善する実践研究に取り組んだ。研究授業を行う教員が抱える指導上の課題を共有し、中学部教員全員で授業改善案について協議を行った。さらに、広島国際大学の國末和也教授による指導助言を基に指導計画や指導案の改善を図り、研究授業を実施した。その結果、数学の問題を自ら解こうとする姿が見られるようになった。生徒が主体性をもって学習に取り組むためには、授業における評価の規準を明確にし、生徒が自分の成長を実感できるようにすることが重要であるという結論に至った。

令和5年度取組

令和5年度は、中学部教員で、KJ法を用いて、生徒の主体性を育むうえでの課題を共有したり、指導・支援の成功例や失敗例を共有したりするなど、議論を行った。その結果、ルーブリック評価の導入、副指導者の活用、生徒への働きかけの工夫という3つの要素が生徒の主体的な学びを促進するうえで特に重要であることが分かった。これらの成果を踏まえ、社会科の研究授業を実施したところ、積極的に意見を出し合おうとする主体的な学びを促すことができた。



令和6年度取組

令和6年度は、令和4、5年度の成果を踏まえ、美術科の研究授業に向けて、年度当初から半年間、教員間で協議を行った。従来のKJ法に加え、ロイロノートを活用しながら、対象学年の生徒の実態を整理し、美術の授業における主体性を育むための具体的な指導・支援について、多角的な視点から議論を深めた。指導計画や指導案の改善を行い、研究授業を行った結果、自分の好きな美術作品を積極的に発表しようとする姿が見られた。



○成果

KJ法やロイロノートなどのツールを活用し、授業改善のためのアイデアを効率的に共有することで、授業づくりや生徒への働きかけ方、支援の方法に変化が見られた。このように中学部教員全員が「生徒の主体性を育む」という共通の目標を持ち、多角的な視点から議論を重ねることで、生徒一人一人の実態に合った、より効果的な指導・支援のあり方を検討し、生徒の主体性を育むための指導力を高め合うことができた。その成果を次のようにまとめている。

(1) 評価規準の明確化とルーブリック評価の導入

ルーブリック評価を導入したことで、単元の目標が可視化され、生徒が自分の成長を具体的にイメージできるようになり、生徒が目標に向かって主体的に学習に取り組むことができるようになった。

(2) 振り返りの充実

授業後の振り返りをルーブリック評価と連携させることで、生徒は自己評価を行い、次の学習目標を設定できるようになった。生徒は自身の学習を振り返り、主体的な学習へとつなげている。

(3) 多様な支援の提供

ルーブリック評価に基づいて評価を行うことで、副指導者が生徒一人一人の状況に合わせて個別指導や支援を行うことが可能になった。また、話し合い活動では、生徒の組み合わせや進め方を工夫し、全ての生徒が積極的に意見交換できるよう支援した。加えて、重複障害のある生徒への理解を促すための支援方法を参考に、具体的な指導内容を考案した。これらの支援を充実させることが主体性を育む一助となった。

単元名 第4章3節「市場経済の仕組みと金融」			
	+2	+1	+0
単元末テスト (知識・技能)	表裏ともに 80点以上	平均 50点～79点	平均 49点以下
まとめ (思考・判断・表現)	授業の振り返りのとき、 重要語句を使って学んだ内容を 3行以上書くことができた。	授業の振り返りのとき、 重要語句を使って学んだ内容を 1～2行書くことができた。	授業の振り返りのとき、 学んだ内容を 書くことができなかった。
まとめ (思考・判断・表現)	ペアの人からの評価 8点～6点	ペアの人からの評価 5点～3点	ペアの人からの評価 2点～0点
A…2点 B…1点 C…0点			
課題	社会の自主学習P130～P139 中学公民をひとつひとつ分りやすく	社会の自主学習P130～P139	課題をやらなかった 締切を守れなかった
	主体的に学習に取り組む態度		A B C
A:8点～6点 B:5点～3点 C:2点～0点			
「A」を目指して努力しよう!!			

(4) 授業のパターン化による安心感の醸成

授業の流れを理解していること、取り組むべき内容を理解していること、過去に経験していることが、生徒にとっては安心して学習に取り組める要素となり、主体的な学習活動へとつながっている。いくつかの授業の流れや取り組み方、内容などをパターン化したことで、生徒が主体的に学習活動に参加しやすくなった。

(5) 言語力の育成

自分以外の生徒や教師と話し合いながら課題を解決していくという経験も主体性を育てる上では重要である。しかし、生徒が一方向的に話すだけでは対話が生まれなため、話し合いの仕方を指導したり、様々な言葉を使って自分の言葉で説明する力を育てたりすることも必要である。個々の言語力について各教科での実態等を共有しながら、言語指導を並行して取り組むことが有効である。

○課題

上記のように効果的な指導・支援を整理したが、生徒一人一人の実態や学習状況が多様であるため、全ての生徒に有効な一律の方法は存在しない。障害のある生徒が社会生活を送るうえでは、それぞれが状況に応じて主体性を発揮することが求められる。そのためには、より細かな実態把握を行い、個別的な指導・支援を行うことが必要になる。また、「主体性」という言葉には、自ら学ぶ力だけでなく、自分の考えを表現したり、周囲の人々から必要な支援を引き出したりするなど、様々な側面が含まれている。障害の種類や程度によって、生徒が身に付けるべき「主体的な姿」が異なるため、「どのような主体性を育むべきか」という問いに対する答えは、今後も議論を深めていく必要がある。

○今後の展望

複数の「視点」から検討を行うことで、新たな課題や疑問が浮上し、問題が複雑化する側面も存在する。しかし、複数の「視点」をもつことで、より深いレベルで教育について考えることができ、結果的に生徒の主体性の成長を促すことにつながると考える。今後も、教員同士が協力し、それぞれの生徒に合った指導・支援のあり方を模索していきたい。

高等部の実践

研究テーマ『生徒の主体性を育むための授業実践と評価』

令和4年度の実践

高等部では18歳成年を見据え、生徒が自ら適切に判断して情報をつかみ取ったり、様々な人と対話しながら協働して社会を築いたりする力が大切であると考え、研究のサブテーマを「生徒の主体性を育むための授業実践と評価」とした。また授業形態の違いから実習グループと座学グループに分かれて研究を進めた。

【実習グループ】

実習グループでは授業の目標や評価の基準設定の仕方、生徒の個別の実態に合わせた授業づくりについてなどを中心に協議を行い、評価の基準設定の仕方について共通理解を深めた。研究授業は「生活と福祉（介護実習～衣服の着脱の介護～）」で行い、広島国際大学の國末和也教授よりご指導をいただいた。授業の反省会では、評価基準を明確に示したことで生徒の目標意識が高まっていたなどの意見があり、今後の授業づくりに向けての共通理解を深めることができた。



評価基準の明確化

目標・評価基準の共有

【座学グループ】

座学グループでは主体性のもとせ方や生徒の実態に合わせた授業づくり、語彙力の伸ばし方などを中心に協議を行い、研究授業は普通科1年の総合的な探究の時間「自然から学ぶものづくり」で行った。協議の中では、生徒の自己評価と教師や他の生徒の評価とのすり合わせが必要であることなどが次年度への課題として挙げられた。



課題意識のもとせ方

どちらのグループでも適切な目標設定と評価基準の明確化、活動後に評価場面を設定することが生徒の主体性を高めるために重要であるという意見が多く、今後どのように実践していくかが課題となった。

自己評価と他者評価のすり合わせ

令和5年度の実践

令和5年度も引き続き実習グループと座学グループに分かれて研究を進めた。また、年度当初に浅海（1999）の主体性尺度の3つの要素「積極的な行動」「自己決定力」「自己表現」についても共通理解を深めた。

【実習グループ】

研究授業は総合デザイン科3年の工業科「課題研究」で行った。デザイン検討会で顧客から出たニーズを取り込みながら木製のベンチを製作し、納品を行う授業であった。指導に際しては主体性を育むために「やらされる」ではなく「自らやる」という意識が生まれるよう、活動の必然性や生徒の達成感を大切にして授業を進めていった。生徒同士の発表の場面では、教師を通すのではなく、生徒同士が直接話し合うことができるように、教師と生徒の適切な距離感を配慮した。また、振り返りの場面では自己評価と他者評価のすり合わせをすることで自己理解を深め、デザインや加工方法の変更をし、新たな学びに目を向けることができる場面が多く見られた。



やらされる→自らやる

生徒同士のつながり

【座学グループ】

各教科で生徒の主体性を育むために大切にしているポイントをまとめ、ミニ実践発表会を行った。その後の協議の中では、「目標、評価は生徒が何をどのようにすればいいのかが分かりやすいようにする必要がある」とことや、「主体性を評価するために粘り強い取組を行おうとする側面と自らの学習を調整しようとする側面に注目することが大切である」などの意見が出た。また、主体性の評価は課題提出や授業中の様子などで評価することが多いが、振り返りや自己評価なども取り入れていかなければいけないという意見が多く見られた。

何をどのようにすればよいのかが分かりやすい目標・評価基準



協議を進めていく中で、主体性を高めるためにはコミュニケーション能力も必要であるという結論になり、少人数での授業が多い本校で、どのように生徒のコミュニケーション能力を高めていくかが今後の課題となった。次年度に向けて、主体性とコミュニケーション能力が高まった深い学びを進めていくために、教師の専門性や指導方法などを深めていくことが大切であると考えた。

令和6年度の取組

令和6年度は過去2年間で実習グループと座学グループのそれぞれで行った実践研究を持ち寄り、高等部全体で研究を進めた。生徒の主体性を育むためには、目標設定の仕方、評価基準の示し方、自己評価や他者評価などの振り返り活動などが重要であることを確認し、今年度は各授業で実践する1年とした。

【教師への授業改善アンケートの実施】

現在は各教科等で授業の進め方はそれぞれの教師にゆだねられている。教科の特性上完全に同じ流れにはならないが、生徒の主体性を高めるために共通にできる部分は共通にして授業を行うことが必要であると考え、授業内容に関するアンケートを高等部全教員を対象に行った。「目標提示の仕方」「授業の流れの明確化」「発表場面の設定」「生徒同士が協働する場面の設定」などについて記述し、それぞれの教員から具体的な取組や悩んでいることなどについて共通理解を深めた。アンケート結果から、目標を口頭では示しているが視覚的に残る形で提示していない教科や、時間不足から自己評価や他者評価などの振り返り活動を実施していない現状が明らかになった。

【生徒への学習アンケートの実施】

7月に生徒を対象に「目標、活動のやり方、授業の流れの分かりやすさ」「振り返り活動の実施」についてのアンケートを行った。普通科、総合デザイン科とも、「振り返り活動の習慣化」と「他者評価など生徒同士の関わりの習慣化」の項目が比較的低くなっている結果となった。高等部では活動後の適切な評価がその後の主体性につながると考えており、今後の高等部の課題であると考えた。

生徒の気づきの仕掛けづくり

今年度の研究授業は総合デザイン科1年の数学Ⅰの授業で行った。授業で生徒同士が自分の意見を発表したり、教師が発問や評価をしたりする場面を設定していた。発問の仕方を「はい」か「いいえ」の2択ではなく、生徒の思考が働くような選択肢であった方がよいなど、反省会では様々な意見があり、より良い授業にするための議論を行うことができた。教え込む授業ではなく、生徒同士のやり取りが活発に行われる授業にしていきたいと考え、生徒の主体性を育むためには必要であり、今後の高等部の指導でも大切にしていきたいと考える。



学習の意味付け・価値付け

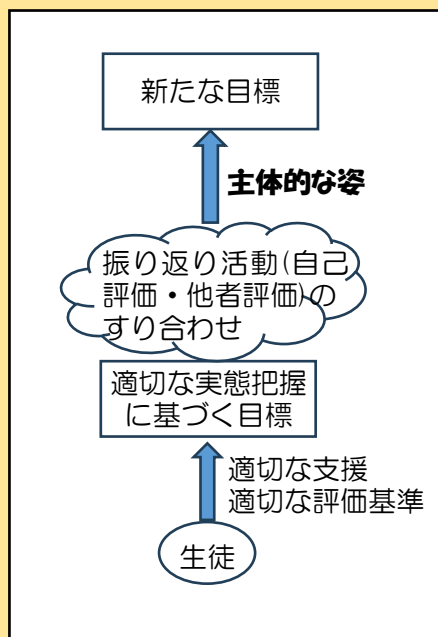
まとめ

令和4年度から3年間の研究で、高等部では生徒の主体性を育むために大切にしていきたいことを授業実践を通して共通理解していった。初年度は研究授業を広島国際大学の國末和也教授にご参観いただき、生徒の主体性を高めるために評価基準の設定の仕方と提示の重要性を確認した。また自己評価と他者評価のすり合わせが、適切な目標設定のために大切であることを共通理解することができた。

2年目は研究授業やミニ実践発表会を通して、授業実践を進めた。生徒同士が協力して活動することができる場面設定や支援の工夫について協議をし、高等部で大切にしていきたい指導・支援について確認し、実践していくことができた。

最終年度は教師、生徒にアンケートを行い、高等部の現状と方向性を明らかにして協議を進めていった。生徒の主体性の向上には適切な目標設定と振り返りが重要であると考え、高等部の現状では不十分であったので、協議を重ねて振り返りシートの共有や自己評価と他者評価のポイントなどを共通理解して実践を重ねた。11月に実施した2回目の生徒アンケートでは「振り返り活動の習慣化」と「他者評価など生徒同士の関わりの習慣化」の項目に若干の向上が見られ、生徒が自ら目標設定をする姿が見られるなど、生徒の主体性の向上につながってきていると考える。

この3年間の研究では生徒の主体性を育むためには適切な実態把握に基づく目標と支援、そしてどのように活動するのかが分かりやすい評価基準で示してあるかが重要であることが分かった。また、生徒が目標達成後に主観的・客観的な評価をし、見えてくる新たな目標に向けて臆せず自ら取り組んでいく姿こそが主体的な姿なのではないかと考える。生徒の主体性を高めることは、急激に変わりゆく現代社会に対応するために今の教育に求められる課題であると考え、今後も本校の最高学部として生徒の主体性を引き出す教育を全教員で共通理解を深めながら推進していきたい。



<参考文献>

浅海健一郎 『子どもの「主体性尺度」作成の試み』 人間性心理学研究(1999)

國末和也 『授業づくりと学習評価～ろう教育の専門性を生かして～』 本校研修講座資料(2022)

寄宿舎の実践

研究テーマ『舎生の主体性を育むために 一人一人が主体的に取り組む舎生会活動をめざして』

令和4年度の取組

令和4年度は、舎生会活動に焦点をあてて研究を進めた。まず、「舎生会活動に舎生は主体的に取り組むことができるか」を検討し、舎生会活動の見直しや目的の確認を行った。令和4年度までの舎生会活動は、指導員の支援により「できた」を経験できる場面が多くあり、その結果として「自己評価が高くなり、正しい自己理解ができていない」という課題が見えてきた。そこで、令和4年度からは舎生主導で活動を行い、「できた」だけでなく「困る」「失敗する」を経験し、それに対する振り返りを行うことが正しい自己理解や主体的な行動につながるのではないかと考えた。

ライフ係

- ・エコキャップ活動
- ・談話室や遊具倉庫の整理
- ・寄宿舎内外の掃除などを中心となって取り組む



イベント係

- ・誕生者の紹介
- ・寄宿舎行事の企画
- ・非常勤の先生とのお別れ会などを中心になって取り組む



アート係

- ・玄関の作品作り
- ・季節の行事の作品作り
- ・誕生者や非常勤の先生へのプレゼント作りなどを中心になって取り組む



今まで舎生会全体で行っていた活動を3つの係に分けてそれぞれの係の役割を明確にした。年間を通して自分の役割がはっきりすることで見通しをもって活動に取り組むことができるようにした。

指導員は最後まで見守ることを意識した

○令和4年度の成果と課題

当初は舎生たちの舎生会活動に対する意識が低く、遊びを優先して係の仕事を忘れていたり、締め切りに間に合わなかったりすることがあった。また、分からないことをそのままにして失敗をする場面もあったが、その失敗の経験を指導員と一緒に振り返ることで「どうしたらよかったか」を考え、「次はこうしよう」と前向きに係の仕事に取り組む姿が見られた。

次年度に向けては、次の活動につながる振り返りになるための工夫が必要だと考えた。

令和5年度の取組

令和5年度は、舎生会のイベント係に焦点を絞って研究を進めた。舎生が主体的に活動に取り組むことができるためには、振り返りが重要であり、適切に振り返ることで主体的な活動が引き出されると仮説を立てた。指導としてはPDCAサイクルを基にした指導に加え、それぞれの場面に指導員のActionを加え「PDCAAサイクル」での取組を行った。指導員が適切なActionを加えることで、舎生が場面において自分たちの取組を絶えず振り返りながら進めていくことができると考えたためである。図1が寄宿舎PDCAAサイクルのイメージ図である。

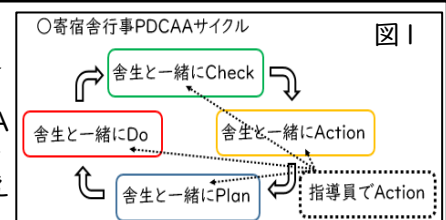
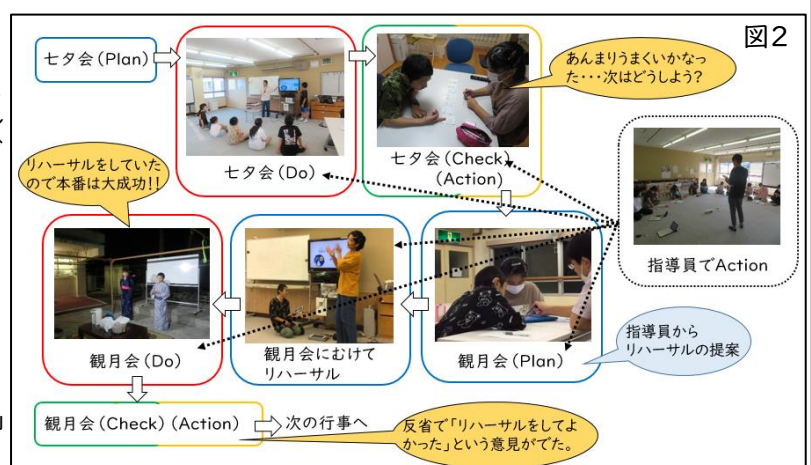


図2は観月会前後の流れを図1のサイクルに当てはめたものである。7月の七夕会の振り返りでは舎生や指導員からActionが多く出た。そこで、次の観月会に向けて指導員から「リハーサルをしてみてもいい？」と提案すると、今までは消極的だった舎生が提案を受け入れリハーサルを行い、本番を迎えることができた。また、反省では「リハーサルをして良かった」と振り返ることができた。

○令和5年度の成果と課題

観月会の取組のように、七夕会での振り返りを寄宿舎PDCAAサイクルで行うことで七夕会から観月会につなげることができた。イベント係の舎生が指導員からの「リハーサルをしてみてもいい？」の提案を受け入れ実施したことは、七夕会の振り返りにより自己理解が促され、指導員からのActionにより解決の方法を知ることによって観月会のPDCAそれぞれの場面に主体的に取り組むことができたのではないかと考えられる。

次年度に向けては、舎生の実態によりめざす主体性が様々なため、舎生一人一人の課題の整理と支援の工夫が必要だと考えた。



令和6年度の取組

令和6年度は、令和4年・5年度で導き出した方法を舎生一人一人に当てはめて研究を進めた。まず、自立活動の実践シートをヒントに舎生会指導シートを作成した。そのシートを活用して、舎生一人一人が舎生会活動に主体的に取り組むことができていくかを検証していった。

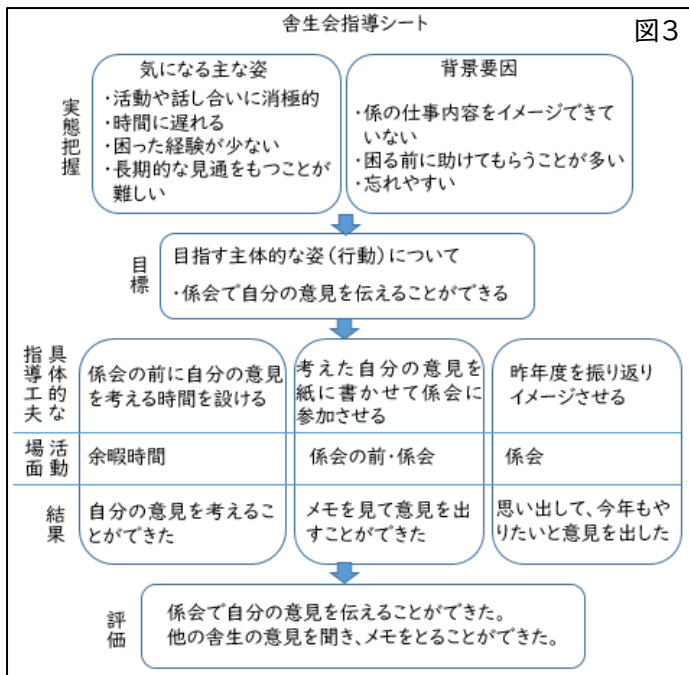
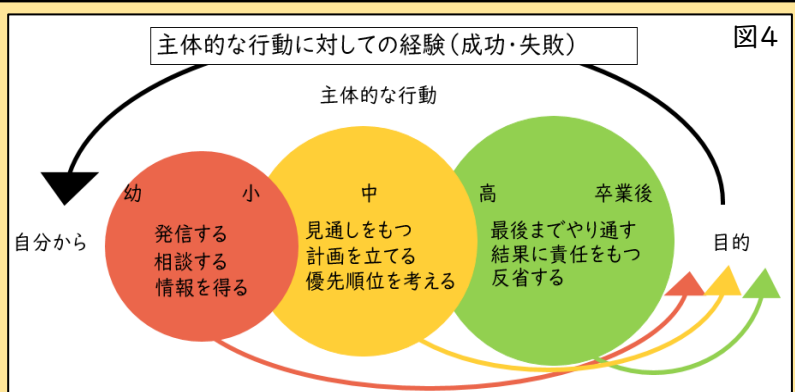


図3の舎生会指導シートは舎生Aのものである。このようにシートを活用し、舎生Aの実態を捉え舎生Aに求める主体的な行動を整理して実践を行った。目標に対する具体的な指導と工夫を実践の都度、検討を加えて継続的に指導をすることで舎生Aの主体的な行動を導き出すことができた。

まとめ

図4は、研究を通して導き出した舎生それぞれの発達段階において望まれる主体的な行動を示したものである。幼稚部から高等部までの幅広い年齢層の舎生が共に生活している寄宿舎では、舎生一人一人の発達段階を把握し、それぞれの段階にあった主体的な行動を増やしていくことが必要と考えられる。

図5は、指導員間で共通理解した内容をまとめたものである。内容は当たり前のことばかりではあるが、その当たり前のことを再確認し、共通理解の上、方向をそろえて指導することで今回の研究の成果につながったと感じている。



寄宿舎の中で主体性を導き出すための指導や工夫 図5

- 舎生の実態把握
- 寄宿舎の生活の中で体験させる
- 環境を整えて、待つ
- 舎生からの意見やアイデアに共感やアドバイス
- 意見やアイデアを舎生が自分で具現化するためのアドバイスや支援
- 意見やアイデアを舎生が自分で具現化した活動へのアドバイスや評価



この3年間の研究で、舎生が主体的に取り組むことができる舎生会活動をめざしてきた。活動を通して「成功」だけではなく「失敗」も経験することで、舎生自身が自分の苦手な部分に気が付き、それを克服するためにどうすればよいかを考え実行し、失敗からの成功を経験することで、課題意識をもちながら前向きに活動に取り組むことができるようになってきた。その結果、舎生の舎生会活動に取り組む姿勢や正しい自己理解などの内面的な発達を促すことができた。今後も、舎生が主体的に取り組むことができる舎生会活動を通して、舎生の様々な気付きを促していきたい。

<参考資料> 岡山大学教育学部附属特別支援学校 発達指導室 リーフレット
「知的障害特別支援学校における チームで取り組む自立活動の指導」(2022)
※舎生会活動→寄宿舎における自治活動